

を消費する市民の反応は決して芳しいものばかりではない。レインボープランに参加している農家にとっては、堆肥の使用基準が一定しないことや栽培技術が安定しないことでの苦勞が絶えず、またレインボー農産物を栽培する経済的メリットがないことへの不満が大きく、レインボープランへの積極性があまり感じられない。レインボー農産物の消費者である市民の反応にしても、限られた一部の市民（主に高齢者）による購入がほとんどで、高価格で見栄えも良くないため、市民への浸透も今一つである、という現実は否めない。

これから、更なる発展を期待するならば、農家への有機農業を支える技術の確立と利益還元、市民へのレインボープランの浸透を深める更なる努力が必要とされるだろう。

## 港北ニュータウンの開発と住民意識について

林 恵都子

近年、人々の自然と開発の調和への関心が高まっている。自然の感じ方は人それぞれで、いろいろな要素によって違うであろうと思われる。人々はそのような要素に対して変化を感じているだろうか。感じ方の違いはどこから生まれてくるのだろうか。港北ニュータウンを一例に取り上げてみた。

空中写真から開発前と開発後の土地利用を1/10000の地図に落とし変化をみて、次にホートン法より地形改変の変遷を追い、最後に住民の認識や意識の変化をアンケートと照らし合わせてみた。

土地利用の変化としては、造成前は雑木林や竹林を主とした山林と田畑が地域の90%を占め、集落は谷戸（やと）部分に集中していた。造成・開発はグリーンマトリックスシステムに基づいて造られ、現在はかつての谷戸やなだらかな丘・山はほとんどが造成され、住宅地（主に一戸建て）・公園・緑道として姿を変えている。

アンケート調査は3つの場所で行い、350の有効回答を得た。ニュータウンの開発を見てきた期間が長い住民ほど公園を人工的なものだと認識し、

地形変化や自然の減少を感じているが、意外に自然に対する満足度は高く、自然と開発の調和を評価していると思われる。また、ニュータウンに来る前にニュータウンと比較して田舎から越してきた住民は自然が多いと感じていて、十分度は低いながらも満足度も高い。『横浜』という地名の持つ『都会』というイメージ・先入観がはたらいているのであろう。最後に、年齢、性別の違いについても調べてみたが、傾向がみられなかった。これらは、自然の変化・満足度の感じ方は年齢には関係がなく、経験によって違いがあることを示唆しているといえる。

また、土地利用図とアンケートの比較からは、人々は田・畑・果樹園が減ったと感じるより『山林』のような『人間の手の加わっていない自然』に強く変化を感じ、土地利用としては一戸建てが大きく増えたのにもかかわらず、アンケートでは集合住宅の変化に多くの住民が注目していて、『開発』という言葉のイメージからあるものに変化を感じていると考えられる。また、ショッピングセンターなどの日々の生活に大きく関わってくるものや、生活に関係ないものでも規模が大きくて視覚としてとらえやすい集合住宅・大企業などに、人々は、変化を感じやすいと思われる。

## 都市近郊の開発の進展と自然に関する住民意識——千葉県東葛飾郡沼南町西北地区を事例に——

藤本 奈央子

本研究の目的は、自然に対する意識が高まりを見せつつある現在、ニュータウンにおいて、住民がその自然環境をどのように感じているのか明らかにすることにある。

現在の地域の自然に対する認識は、開発以前の住民と、開発以降の住民とは、その見ている変化が違うために、異なると思われる。そこで、自然に関する質問、変化に関する質問、フェイス項目の3つの柱からなる住民意識調査を実施、居住歴ごとに考察を行った。

開発後20年以上経っているために、開発以前（居住歴25年以上）、開発後まもなく（居住歴10